



大国隆正と萩原広道 : 一つの但し書き

山崎, 勝昭

(Citation)

國文論叢, 20:52-66

(Issue Date)

1993-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011785>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011785>



大國隆正と萩原広道

— 一つの但し書き

山崎勝昭

(一)

例えば手近な人名辞典の「萩原広道」の項に、「(広道は) 歌を平賀元義に、国学を大國隆正に学んだ」(『新潮日本人名辞典』)とある。間違ではない。しかし、前者についてもそうだが、特に後者については、特にいろんな但し書きが付きそうである。

広道が十四才の時、元義に歌を見てもらったことは、彼の「自叙伝」に記されている。¹⁾その中で、「このころのさつきのあめに水かさます池の菖蒲は今花咲きぬ」という作品が、万葉の調べにかなっているとはめられたとある。だが、残された彼の和歌作品に、万葉派の元義のそれと共通するものがほとんどなく、²⁾歌人の系譜として元義門と言うことはとうてい出来ない。師弟関係があったとしても、年少時のほんの一次的なものだったと考えられる。

一方、国学における大國(野之口)隆正との関係はどうか。清宮秀堅『古学小伝』に、広道の門人であったという松野真維の、「翁(広道のこと―引用者)野々口隆正ニ語格ノヲ聞ントテ、備前ニ在リシトキ、名簿ヲ送リシヲアリ」と言う言葉を引いてい

る。そして、その真維の言葉を裏付ける広道の書簡がある。それは、野之口正武(隆正の養子)編『瓊斎社友年々録』に、自分の作品が採られていることに触れた嘉永元年八月七日付鈴木高頼宛書簡(桜井武次郎氏蔵)で、その中に、「正武方ハ承候ヘバ野々口流の哥ばかり集候とやら。野生なども隆正翁ニてハを傳受して、もらひ候故申候よしニ御座候」とある。³⁾(傍点引用者。以下同じ)

この真維及び広道の言葉から、次のことが言える。隆正に「語格」[「てにハ」(国語の文法)]を教わったことがあること、それから、「名簿ヲ送」ったということ、広道が隆正に(正式に)入門したことがあるということ。しかし、そのことはすでに過去のことであつたらしいこと。書簡中の「野々口流の哥ばかり集候とやら」という、隆正(または彼にかかわること)をよそ事のように表現している点などから、はた目にはそのように映る。

隆正が、江戸で火事に遭い単身大阪へ移住してきたのは、天保五年四十三歳の時であつた。⁴⁾同七年に、播磨・小野藩主に招かれて藩の子弟に国学を教授し、十二年、小野を辞して、京都で家塾・報本学舎を開く。備前岡山の広道が「てにハ」の「傳受」をうけ

たのは、隆正の小野滞在中に違いない。その一番早い天保七年だとしても、広道はすでに二十二歳。従つてこの時の質問は、広道なりに勉学を重ねた上での専門的な事柄にかかわるものであっただろう。

「国学を大國隆正に学んだ」ということの内実は、さしあたりは右のごとくである。

(二)

広道における隆正の影響を小さく見るのは、先に両者の師弟關係を指摘していた真維で、彼は、前記引用に続く文章の中で、「然レトモ学風ハ野々口、シノ流ニアラサル」、著書ヲ以テ知ルベシ」と言っている。確かに、真維が「著書ヲ以テ知ルベシ」と言うように、両者の書いたものを少し覗くだけでも、その「学風」の違いは容易に了解される。

例えば隆正は、『本学挙要』（日本思想大系『平田篤胤伴信友・大國隆正』所収）の中でこんなことを言っている。

考証に大小の差別あり、他の先生たちの考証は、小考証にして、いま隆正がする考証は大考証なり。小考証は、書籍を考証する考証なり。隆正が考証は、天地を考証にする考証なり。：小考証に泥める国学者たちの、隆正が説をききて、考証なしといひ、牽強附会とそしめるなるべし。そは考証に大小あることをしらぬ偏見なり。：書籍の考証にのみ泥みては、これらの大理をうることをあたはず。しかはあれど、これはいとくかたきことにて、隆正がこれをすれど、門人には禁じてなさしめず。毫髪のがひ千里をあやまることあるべけれ

ばなり。隆正は百たび考へてすることなれば、隆正が説にしたがふ人は、隆正が説にしたがひて別に見識をいだし、隆正より上にいふなどはすべからず。本居先生は「われよりまされる説あらばいふべし」と門人にしめされたりき。隆正はそれに反して、「われよりまされる説ありとも、隆正が説をかぎりとして、それよりうへをいふべからず」としめすなり。しめすことばは、異なれど、皇国のためをおもふ真心はかはらず。

一方、広道はどうか。本居宣長は『うひ山ぶみ』で、「古書の注釈を作らんと、早く心がくべし」と言つた。そうすることは己の学問の上達のために得るところが多いし、たとえその注釈が成就しなくとも、学問に大なる益のあることだからである。広道は、この宣長の言葉に共鳴し、その主著『本教提綱』（大阪府立中之島図書館蔵。旧名『本学大概』また『本学提綱』）において、わざわざ「著述」という章を設け、その宣長説を敷衍している。

学問の浅い者ほど「考証などの事もいと鹿略になりがち」で、そのため「ひがごと」を言うことが多い。しかし「注釈」というものは、「古書に従ひて注するものな」ので、「大かた強説をいふことも少」なくなる。古典注釈に従事することは、初心者にとつて大層好ましいことなのである。さらにまた、「学問の道ハいとく廣く大キ」い。一方「人命ハ限ある物」だから、一人で全てを見尽くすわけにはいかない。つまり、学問の世界というものは、「とにかくに唯一人の才識を以てハ」定めることは不可能なのだ。そのためにも、自分の明らかにしたことを、「遍く世に押出して天下の人に評」してもらわねばならぬ（そしてさらに広道は、この

観点に立つて、「古書の注釈」を作ること、つまり、「著述」することの意義を力説する。それだけにとどまらない。「且学問ハ、いつまでも際限なきもの」であって、「此にて尽したりといふべき事ハ世のきハみあるべくもなき事」なのである。これで完全だということとはなく、物の道理というものは、以前の考え（説）が修正されつつ、次々と明らかめられて行く。つまり、前のものの批判を通して、後になるほど物事は正しく理解されていく。広道はこのようなことを考えていた。⁽⁵⁾これを古典の注釈という作業に引き付けて考えれば、後の世のものほど注釈はより正確になっていくことになる。事実広道は、「そも／＼万事は次第に明りゆくわざにしかれば、もの、注釈ども、最後に出来にたるが穩しくたらひたるはもとより然るべき理なれ」と、香川景樹『百首異見』を評した『百首異見摘評』（岡山県総合文化センター蔵）の中で言っている。

隆正の『本学挙要』の言葉に対応させながら、広道の考えを要約すれば右のようになる。広道の実証を重んずる態度については別に触れたことがあるが、そういう態度は、隆正側から見れば、「書籍を考証する考証」であって、したがって広道は、「小考証に泥める国学者」ということになろうか。ここで、隆正の「独善」を責めるのはたやすい。しかし、そのことはさしあたり問題ではない。とにかく広道の「学風」が、「野々口、…ノ流ニアラサル」ことについては、誰しも認めざるを得ないだろう。

その違いは、同時代の人にも映っていた。例えば、豊前の渡辺明という人が、諸国の有名な歌人・国学者を歴訪し、その感想を長崎の中島広足宛書簡（弘化四年八月七日付。弥富浜雄編『名家

書翰集抄』所収）に綴っているが、その中に、「野々口は平田之奇癖怪説を信奉する人也、西田も近之、浪華には広道を第一とす、村田、熊谷等は歌よみのみ。京にては大橋を温厚君子とす、…」などである。広道が大阪で一番の学者だったかどうかは、今問うところではない。少なくともこの文面から、「広道」と「野々口」とが同じ学風に属していると考ええる人はいないだろう。ましてや「広道」が、「野々口」門であるなどと想像も出来ぬことに違いない。

(三)

繰り返すようだが、清宮秀堅『古学小伝』にまた、「誰ヲ師トイフナケレド、…幼ヨリ国書ヲ読ム」好マレ、…とある。つまり、広道の「師」と言えば、元義・隆正でなければならぬが、彼らはかりそめの「師」と言うべく、広道の学問形成に深い影響を与えた師でなかったということなのだろう。このことは、元義についてはおそらく問題はない。隆正についても、右に見るかぎり問題ではなさそうだ。しかし実は、それが師弟関係と呼ばれるものかどうかはともかく、隆正との関係は、「てにハ」伝授で終わる一過性のものでは決してなかった。後で見るように、二人の関係は相当ながく保たれていたのである。ただし、そのことを確かめる前に、隆正について、少し見ておきたい。

当時、隆正は、国学者仲間での評判は芳しくなかった。僧義門の天保十四年四月十二日付伴信友宛書簡（大鹿久義編著『伴信友来翰集』所収）に、「諸平・内遠かねて隆正の事ニ付ぶつ／＼申候」ともある。その（加納）諸平の隆正批判がどのようなものであつ

たか分からぬが、(本居)内達のそれは、天保十二年霜月廿九日付中島広足宛書簡(弥富編前掲書)に、

野々口隆正大分著述有之趣なれど、一見致し候は、憐駁者はまづ此方の方人にて、よく候へ共、文がらいやし、おとなげなき方に候上、全体此人の出自しかと不存候、一比は篤胤へも隨身いたし居、其後変名致候とかも風聞有之、又蘭説などを取交候人と被存候：いづれにも方々の説を取り込み候さまは、著述の目録などにて、想像せられ申候、：さては鼻くらべのさうしなどと申は、馬琴、三馬、一九が党にていたすべき物、古学者の齒牙にかくべき書には候はず、兼好が一代記のやうの戯作、小説も見及候、是も同様ながら少々中に議論は有之候、されど其説不当はいかが候はん、右之外はいまだ見及不申候、神代窮理説などはさだめて蘭説が、りにて、鶴峯戊申が『天の御はしら』めきたる物にも候はんかと想像せられ候。

とある。おそらくこの内達の批判は、本居家当主の言でもあり、当時の平均的な隆正評を代表しているのではあるまいか。

隆正批判は、彼が翌天保一三年「棚雲考」という論文を発表してから、さらに強くなった。信友がまだ江戸に居た同年の、京都から江戸へ移住したばかりの岡部東平の信友宛書簡に、「野之口隆正事、是ハ江戸人ニテ、津和野候の家士のよし。今井トカ申居候由。志ハ一宗ノ開山ト仰カレマホシク、唯々新説ヲト志申候。学問、大鉢ハ東平とらうへニて御座候。しかし義門僧とつき合申候も同事ニて、道ハ道と別ニいたし置、又はあちらのよき所ハ世話ニ相成申候。但シ、隆正、語学その外蘭説を以て神典をとき、

陰陽五行を附会して、手島道話と云やうすの事ハ、嘔吐ナホ嘔吐。」(大鹿編前掲書所収)とあり、翌十四年、信友門人で紀伊藩の長沢伴雄の信友宛書簡(同上)に、「隆正、しきりニ棚雲考を主張致し、この比ハ古事記ト左伝とを調合して講釈をいたし居候より。をり／＼人伝に承り候度に、嘔吐を催ふし申候。」とあり、あたかも口裏を合わせたように、「嘔吐」という言葉を用いて、隆正に対する不快感をあらわにしている。東平の書簡には「棚雲考」という文字はあらわれないが、それを意識して書かれている。さらに妙玄寺義門の先程引いた書簡に「嘔々筆話のあの棚雲考よ、諸国の笑具となれる事なるに」とあり、さらに又別のところ(「備字例評弁」)で、自分の論文がこの隆正の「棚雲考」と同じ論文集(「嘔々筆話」)に載っているのを「恥づ可きの甚し」とまで言っている。天保十二年四月、西田直養の提案で、隆正・東平・伴雄・義門たちが集まって、温古会という研究会を組織した。「嘔々筆話」というのは、その紀要とでも称すべきものであるが、問題の「棚雲考」は、これに掲載されていたのである(『日本随筆大成 第一期第9巻』所収)。

この論文は、彼の他の書き物に比べると、まだおとなしいように思うが、隆正らしさというのは勿論出ている。例えば、「雲」「雨」の語源を説いて、「酌(ク)むといふことばより、雲といふことばいでき、浴(アム)といふことばより雨といふことばいできたるものなること、此図によりてさるとるべきなり。」と言い、地上から水蒸気の上がつて雲となりその雲から降る図を、説明文の下に丁寧に添えている。要するに、この「棚雲考」は、批判者からすれば(内達の言葉を借りれば)、「蘭説などをも取交」え、「方々の説

を取り込」みながらの、古事記・万葉集等に出る言葉（の語源）解釈の一つの例であつて、東平が、「隆正、語学その外蘭説を以て神典をとき」と非難したのはの外れではなかつた。

「棚雲考」に限らず、その言動をあれこれと非難された隆正だが、しかし彼はほとんど気にしている様子はない。先の引用（『本学掌要』）を再引用すれば、「考証に大小の差別あり。他の先生たちの考証は、小考証にして、いま隆正がする考証は大考証なり。

小考証は、書籍を考証する考証なり。隆正が考証は、天地を考証にする考証なり。……小考証に泥める国学者たちの、隆正が説をききて、考証なしといひ、牽強附会とそしめるなるべし。そは考証に大小あることをしらぬ偏見なり」という具合で、批判者の方が未熟だという口ぶり。これは、別に「棚雲考」非難に応じたものではないが、彼の書き物に対して「考証なし」「牽強附会」という批判がつきものであつたことを、彼本人は十分承知していたのである。

隆正の書いたものは、東平の言を借りれば、「手島道話」みたいなところがあり、少なくとも読み易さという点では申し分ないはずなのだが、しかし実際はなかなか（私には）虚心に読めない。何度も眉に唾をつけて用心してかからないと、どこへ連れていかれるかわからぬという心配があるし、しばしは出会う独善的言辞には、東平・伴雄ならずとも「嘔吐」を催しかねないのである。だから広道伝で、隆正の影響を（無意識的にか）小さく見る（見ようとする）のはわからぬではない。

しかし、右に見たようなことが隆正のすべてであるなら、幕末期から明治にかけての彼の活躍よりは説明できないだろう。ある

人々に嘔吐を催させるようなことばが、時には別のところで大きな力を持つことだつてあるのだ。

隆正は、「隆正が考証は、天地を考証にする考証なり」言つていた。東平に「志ハ一宗ノ開山ト仰カレマホシク」と、憎まれ口をたたかれていたが、たしかにこの隆正の言葉など、夜郎自大な独善的言辞・鼻持ちならぬ大言壮語と見なされる可能性十分である。しかし人は、手堅い「実証」のみで動かされるとは限らない。「天地を考証にする考証」が、人をとらえることも十分ありうる。そんなことを思わせるところが、ほかならぬこの悪評高い「棚雲考」に見える。例えば、この論文を書くきっかけを記した次のような部分はどうか。

天保十一年四月、しばし姫路の仁壽山にやどりて、物の講釈などしたりしをり、この多那をなす理を見きはめたり。さるは奥山村といふところにて、夕ぐれ芥をよきたり。そのけふりいとなん多かりける。火の事にやと疑ふばかりなりけり。その煙その山の半腹までのぼりて横にゆく。これを門人どもに示していへるやう、たなびくとはこれをいふなり。これより下にも棚はあれども、それをばしのぎてのぼりてしのぎえざる棚にあたりて横にゆくなり。こよひあなたに眼をつけ、しるしをなしおけといひつけおきて、あくるあしたとおきいで、ともに見たるにそのけふりそのまゝあり、まじるしをなしおけるあたりよりは、ひききさがりてあり。かの夜気のくだるにおしきげられて夜の間にひきくなりたるにぞありける。見るうちに山のうしろより日かげさしのぼりて、山の末をてらす。てらされて、その煙り末のかたより、かた

あがりにあがりて、つひにきえうせぬ。水気の凝れるも、日の引力によりてはつひに融解する理をも、あはせてしりたりき。

見られるように、「隆正が考証は、天地を考証にする考証なり」という主張をさながら地で行っている。そんな趣の文章である。ここのところを読んでみると、例えば、明治の「文明開化」から遠からぬ頃のとある山間の分教場が目につかぶ。師範出たての若い教師が、理科の時間であろうか、窓から見える煙りを指さして、その煙りたなびくさまにも、「理」のあることを、熱心に（自分でもそのことに感動し酔ったように）話している。村の子供達も、先生の熱心さにうたれ目を輝かして聴き入っている。そんな情景が彷彿としてくる。それというのも、実は、この隆正の「仁壽山餐」での「講釈」を、若き安民が聞いていて、その後隆正に入門したということがあったからだ。安民とは、言うまでもなく広道終生の友であり、「追々練磨しては彼はよほどの学に相成可申候と存候」（嘉永四年四月十日付高納宛書簡《関西大学図書館蔵》）と、広道がもっともその大成を期待していた秋元安民のことである。（彼は、姫路藩好古堂教授にもなり蘭学にも興味を示し西洋型大船建造をも指揮し完成させたり多方面に才能を発揮するが、惜しくも文久二年四十才で病死する。）

隆正が講釈したという「仁壽山（餐）」は、姫路藩の家老河合寸翁が、文政四年に設けた私立の学問所で、そこへ隆正は寸翁に招かれて講義しに来たのだった。一方、安民であるが、姫路藩士とは言え四両三人扶持という「軽輩」の子であった。兄もいたが小さいころからかなり苦労したらしい。十一才の時父が死去。十六

才で母とも死別。岡山藩士で「軽輩」の広道と（彼もまた幼い時に母に先立たれたが）、どこか似通ったところがある。その安民は、九才から十九才まで、つまり天保二年から天保十二年まで、この「仁壽山餐」で使丁として使われ、寸翁の収集による膨大な蔵書の出納係などをしていた。そのときまたまた、隆正の講演を聞く機会を得たのであろう。隆正に入門した安民は、その後しばらく隆正と行動を共にする。一時隆正の養子になったこともあった程である。隆正が小野藩を辞し、京都に出たときも、彼はその後に従ったのだった。⁽⁹⁾

ところで、多くの国学者の輩慶を買ったようなものに、安民は、何故ひかれたのだろうか。実際のところは、わからない。彼は、隆正に従って京都に出てから、更にまた伴信友にも入門するほどで、隆正のいわゆる「書籍を考証する考証」「小考証」を決して軽視しない（学問に対する姿勢・資質の上でも広道と似たところが多いように思う）。だから、向学心に燃える若き安民（このとき十七才）が、感動して聴き入ったのは、隆正の講釈の「正しさ」の故ではおそらくなかった。そんなことは、ほとんど問題ではなかったはずだ。

現実社会の厳しい身分秩序の中で、学問の世界もまたそれと無縁でないと思ひ知らされつつあった「軽輩」の子・安民にとって、隆正の話は、既成の学問にない新鮮さで迫って来たのであろう。そこで教えられた眼前の「自然」の不思議さに、文字通り目を見張らされた。それが、隆正流のあやしげな西洋窮理学に基づいたものであったところで、さしあたり安民には関係なかった。それだけではない。隆正の言いたいのは、この眼前の自然の運行が、

さながら日本の「神典」の世界であるということだった。儒教だの仏教だののこちたき教えのいつて来る前の、いわゆる「本教」が素朴な人々をとらえていた時代の「正しさ」が、まさに眼前の自然の摂理として顕現している。隆正は「棚雲考」の最後を、「このくにのいにしへ天文窮理などいふことあげはなくて、たゞ天之八重多那具毛といへる微言に、かばかりの天地の大理そなはりてありけるもあやしく、又さばかりもの、ことわりを精しくいふ、西洋の窮理家の、この八重棚のことしらぬもあやしくなん。」と、彼のいわゆる「神典」の正しさとその普遍性とを揚言しつつ結んでいるが、おそらく、「仁嘉山餐」での講釈の最後もこのように結んだのであろう。専門の国学者から見ると、「嘔吐」を催すような恣意的・ゴツマゼ語源解釈も、若い安民には気にならなかったに違いない。すくなくともこのときの隆正は、安民に「新しい世界」を垣間見させてくれたのである。

（先にも触れたように、広道が隆正と出会ったときは、安民とは違っていた。未熟ではあったかも知れぬが、まがりなりにも（国）学者としての自己を確立しつつあった。隆正との出会いをもっとも早い時期に見積もっても二十二、三才になっていたはずの彼は、十七才の安民よりは、隆正を客観化・対象化し得たであろう。しかし安民をとらえた隆正のある種のロマンティズムの精神——理想化された古代への憧れと、しかしそれを彼岸化せず、に現在に見出し出していこうとする現世的・行動的な精神——に、彼もまた、共鳴するところがあったのではないか。）

（四）

広道と隆正との関係は、「てにハ」伝授で終わる一過性のものではなかった。いやそれどころか、広道は圧倒的な隆正の影響下にあった。そのように解釈できる「証言」が、松田直愛の信友宛書簡（弘化二年十月廿一日付。大鹿編著前掲書所収）に、次のようにある。

（前略）過日者初二御窺申上候処、早速御逢被下、殊更御懇意ニ被仰聞御高説奉承、難有仕合奉存候。其后一応御礼旁参上可仕筈之処、帰坂差急き無其儀、失礼仕候。随而其砌被仰聞候何某主御集歌、帰坂後十六日嘉言月並会ニ罷出、御伝言之趣同人始め殿村茂済へも申聞候処、難有段申居候而、同日江戸人尹香も参り合。不量面会仕候。嘉言・茂済・足穂等へ短冊為認候。尚直養へいまだ出会不申候へとも、御短冊もたせ遣置申候。自然延引之程もと存、私方ニ有合候を一枚此度差上申候。葭沼と御座候ものハ、備前藩萩原広道と申すものに御座候。野々口隆正隨身の人ニ御座候。尚愚詠相認め、都合六枚差上申候。御落手可被下候。（後略）

弘化元年正月、伴信友は、小浜藩主酒井忠義の京都所司代就任に伴い、三十年ぶりに江戸から京都に戻つて来た。この高名な国学者の京都移住を、京・大阪の文人たちは歓迎し、江戸在住時にすでに信友に師事していた紀伊藩の長沢伴雄をはじめ、西田直養ら面会を求める者が多くいた（また、安民のように入門する者もいた）。この松田直愛も面会を求めた一人であった。彼は、信友に依頼された短冊集めにも喜んで応じている。直愛もそこに属して

いたらしい(村田) 嘉言社中の人々をはじめ、彼に頼まれた人はみな、信友の名を聞いて「難有段」を「申」し、すぐさま歌を差し出した。嘉言社中ではなかったが、その中に広道もいた。彼がかねがねこの名高い国学者を尊敬していて、一度面会を求めたいと思っていたのだった。¹⁰²もちろん、喜んで短冊を直愛に託した。こんなことが、右の直愛の書簡から伺える。

しかし最も注目されるのが、言うまでもなく、「葭沼と御座候ものハ、備前藩萩原広道と申すものに御座候。野々口隆正隨身の人ニ御座候」という記述である。広道は「野々口隆正隨身の人」であるとと言う(この「隨身の人」と言う意味がちよっと分かりにくい、先に引いた本居内達の書簡中に、「(隆正は)一比は篤胤へも隨身いたし居」とあった。また別に渡辺明は、隆正のことを「野々口は平田之奇癖怪説を信奉する人」とも言っていた。この二つのことから、「隨身(する)」という言葉は、ある人の思想と行動を「信奉」しつつその人の強い影響下にあると解しておく)。要するに、広道は隆正の思想・行動を忠実に信奉する者だと直愛に映ったのである。直愛のこの発言は、真維の「誰ヲ師トイフヲナケレド」という言葉から受け取る印象、また、先の(一)での広道書簡から受ける印象とも大きく異なっている。

この松田直愛と言う人のことだが、残念ながら、大阪の裕福な商人だったらしい程度のことしか分からない。ただ、歌人・国学者たちの経済的な支援者でもあったのか、かなり付き合ひのひろい人であったようだ。先にあげた何人かの隆正批判者たちとも付き合ひがあり、中でも義門とは親しかったようである。したがって、直愛は、隆正の(芳しくない)評判を当然耳にしていたと思

われる。しかし、この「野々口隆正隨身の人」と言う言葉には、文章全体の調子から見て、揶揄的・嘲笑的な意味合いは込められていない。さらに、直愛は、広道が大阪に移住してきた時に援助してくれた数少ない一人でもあった。広道が大阪に出てきたのは、弘化二年五月頃と推定されているが、同年十一月十七日付藤井高雅宛書簡(井上通泰「萩原広道消息」所収)に、つまり、直愛が信友に広道のことを「野々口隆正隨身の人」と紹介して間もない頃の書簡に、「直愛も折々参り申候。何角世話にもなり申候。同人取次にて板行下之筆耕を仕、此節季をば過し申候。」とあるし、その後も何度か広道の書簡に出る。直愛は、おそらく広道の才能を見込んでのことだろうが、広道のために経済的な援助をするだけでなく、また学者仲間へも引き立ててくれていた、その一例として、この書簡を見るべきである。

つまり、「野々口隆正隨身の人」と言う評は、直愛の目に映ったそのままの像が他意なく発せられたものであった。ということは、広道の言動にそれを見合うものがなければならぬことになるだろう。例えば、大阪に出て来たばかりの広道が、頻繁に京都の隆正と行き来しびったり彼に寄り添っていたとか。しかし、今の所、そんな頻繁に行き来していたという事実を示すものは残っていない。広道はこまやかな手紙を書いた人だと言われているが、弘化二、三年のころの書簡(といってもほんのわずかだが)の中には、残念ながら、隆正との交流に触れたものはない。そうすると、他に考えられるとすれば、広道自身の言動に隆正を彷彿させるものがあつたのではないかということである。

一つは、先にも触れたが、広道の著作『本学大概』(以下『本教

提綱」と称す)の存在である。「本学(または本教)」と言う言葉は、必ずしも隆正(派)の独占ではないが、彼は、「皇国には皇国の古伝説ありて、天地の造立、異国の説とことなり。古事記序にこれを本教といへり。(中略)あはれこの本教をもと、して、儒書・仏書・道書・西洋書・天学・医学、その外政事のたすけとなるものどもを、あつめよましむる学校こそあらまほしけれ。」(『神理一貫書』——『大國隆正全集第五卷』所収)と言ひ、さらにその「学校」について、具体的に次のように語っている。

隆正播磨の小野にありし時、その君の仰ごとにて、学問所をとりたてたり。帰正館となづけ、本教・儒学とふたつにわけ、ひとつにまなぶところとせり。これはわが子野之口正武、われにかはりてこれをつかさどれり。またおなじはりまの姫路に、好古堂といふ学問所あり。そこにも本学寮たちて、門人齋藤正蟻つかさどれり。これは本学・史学・律学・語学とよつにわけて学ばす。これをはじめてそこ、に、さるたぐひの学問所いできなるとするは、この道の世におこるべきはじめにてありぬべし。

国学の呼称を本学に改称すべきだと各藩校に働きかけ、藩の隆正門の人々はそれに応じるべく努力した。その一つに姫路藩校・好古堂があった。「仁壽山餐」での講釈以来、隆正の門人が多かったようで、先の安民をはじめ、右に名のある好古堂教授・齋藤正蟻(守澄)もその一人だった。広道の『本教提綱』は、実にこの好古堂のテキストとして書かれたものである。序文を安民が書き(弘化三年四月付)跋文を守澄が記しているのも、この書の性格をよく示している。広道が「文人」として立べく大阪に移住して

きた時、持参した草稿の中でもっとも大切なものは、この『本教提綱』であつたはずだった。直愛に「野々口隆正隨身の人」と映つたとしても、無理ではない。

またこの頃の広道のラジカルな側面をうかがわせる例として、こんなこともある。西田直養が、歌文集『直養集』の評を義門に請うた時、義門は、その中の「孔子のをしへ仲子が法もさかゆけ」といふたまはぬそ神の道なる」という歌を取り上げ、「かゝるは篤胤ナト議論好ノイヒソウナル」ニテ、哥によめば鬼神モヤサシクノ意ニハイカバシ」と厳しく批判した。その三年ほどあと、つまり大阪へ出て来て間もない弘化二年八月、直養に同じく『直養集』の評を求められた広道は、この義門評に対し、「あげつらひするも道の為にはあらめ。議論好といふ事猶うべなひがたし。鬼神を和くる哥なりとも道のことよまずとはいかで定めん。しか世のさま花に遊ぶ日ごろの事こそあらめ。皆がらなびきつゝをらばつひに道は得がたかるべし」と、強く反駁している。直愛がこの弘道の評を知っていたかどうかは分らない。しかし、歌に対するそのような見方は、広道の言葉の端々に出るであろう。義門に近く、また渡辺明の国学者評で「村田、熊谷等は歌よみのみ」と言われていたその「村田(嘉言)」杜中でもあつた直愛は、「花に遊ぶ」世の歌人を批判し「道の為」に「あげつらひする」広道に、おそらく辟易しながら応対することもあつたのではないか。義門が直愛の歌を「篤胤ナト議論好ノイヒソウナル」と言つたと同じく、直愛は、広道の言うことを「隆正ナト議論好ノイヒソウナル」とでも思つて聞いていたかもしれない。

直愛の広道評、つまり「野々口隆正隨身の人」という評はおそ

らくこのような広道の言動に接して出てきたものだったろうと思う。それは、「誰ヲ師トイフ」ナケレド」という『古学小伝』の言葉果真つ向から否定するかのようである。ただ(二)で見たように、とにかく両者の「学風」の違いは明らかだから、『古学小伝』の言葉を否定することは出来ない。「師」というものを厳密な意味とれば、(二)に引いた書簡での広道自身の言葉をも考え合わせると、その言葉はますます否定しがたいであろう。しかし、広道が隆正のごく近いところにいたこと、広道が隆正を主唱者とする思想運動(本教運動)の担い手の一人であったことは、間違いないだろう。

(五)

岡山藩致仕(脱藩)の直接の理由は病氣だと、広道自身は言っていた。つまり、病氣のため都落ちならぬ岡山落ちということだったから、広道の大阪移住は、目的をもった積極的な行動とは見えにくい。何となく余生を送るためやって来たという極めて消極的なものに映る。ところが実際はそうではなく、相当意気込んで大阪へ出てきたのだった。そういうことが、広道に近かった直愛の「野々口隆正隨身の人」と言う広道評から推察されるのだった。さてこのあと、広道と隆正の関係を評した第三者の言葉を、残念ながら聞かない。しかし、幸いなことに、広道自身の書簡に隆正の消息が記されているものはいくつかある。その一つは、すでに(一)に引いた嘉永元年八月七日付鈴木高柄宛書簡であるが、以下、私自身の気付いたその他の書簡を少々コメントを付して年代順に示す。

気付いた中で、隆正に触れた一番はやいものは、「野々口隆正へ被遣候哥是又早速通し可申候。但彼翁天性怠惰之人之上殊外多忙と聞えしバ／＼尋遣候事も毎々夫成二なりかち二御座候間一定返答致候事無覚束御座候。此段ハ野生か怠二ハ無御座候間御含置可被下候」(嘉永元年三月廿一日付高柄宛書簡《関大蔵》)という書簡である。前年末に知り合った周防・宮市の鈴木高柄に類題集(玉石集)の企画があり、広道は作品(和歌)収集の依頼を受けたが、その中に隆正にも頼むように言われたのだろう。この書簡がその返事である。広道が隆正に近く、彼に連絡のとれる位置にあったことがわかる。それだけでなく、「但彼翁天性怠惰之人之上殊外多忙と聞えしバ／＼尋遣候事も毎々夫成二なりかち二御座候間」という文言から、両者の間がら想像される。几帳面な(と思われる)広道に対して、「天性怠惰之人」である隆正。また、おそらく病氣のせいもあろう、いわば書齋派の広道に対して、「イデオログ」・「オルガナイザー」として飛び回っている隆正。そういう対照的な性格・資質でありながら、広道は親しみを込めて隆正のことを書いている。この書簡の文面からそんな風に受け取れる。

隆正はこの年姫路藩和学校好古堂に招かれ講義している。彼を呼んだのは門人齋藤守澄だった。また、福山藩にも招かれ講義し、『やまとごころ』を著し藩主阿部正弘に差し出した。実はこの著作が儒者側の猛烈な反発を買ひ、ちよど平田篤胤が、幕府の忌諱に触れ江戸から追放されたように、隆正も追放されかねぬような大騒動になった。水戸斉昭のとりなしでなんとか収まったようだが、とにかく「殊外多忙」の人であった。(ただし、広道にこの

事件に触れたものがない。斉昭は、この『やまとごゝろ』を読むため、当時大坂城代だった土浦藩主を通して佐久良東雄から手に入れたという。東雄と親しく行き来していた広道がこのことを知らぬはずはないのだが。

また、あちこち遊説し回り「殊外多忙」という隆正を、広道が氣遣っている書簡がいくつかある。少し後のものだが、例えば、「野々口いつ頃錦地罷立候哉。広島廿日市迄参候様子ハ粗広島より承候へと其後之様子ハ相分り不申。色々御役介被下候段奉多謝候。未此辺へハ罷帰不申候。」（嘉永三年霜月六日付高頼宛書簡《桜井氏蔵》）「野々口御役介奉謝候。」（嘉永三年十一月十四日付高頼宛書簡《関大蔵》）「野々口老未錦地辺へは帰り不申候哉御示し可被下候。当年は中国筋凶作にて嘸々迷惑と相察申候。」（嘉永三年十一月廿五日付高雅宛書簡《井上編前掲書》）という如くである。とくに「色々御役介被下候段奉多謝候。」などという言葉は、家に落ち着かない極道おやじを氣遣う孝行息子の挨拶さながらである。このような文言から考えると、広道にとって隆正は、「他人」ではなかったようだ。同じ運動にかかわる先達に対する「身内」意識がここにかがえるように思う。

ただ、広道と隆正の交流と言っても、何故か一方通行のようで、隆正側からの情報が入ってこない。それはいま現在、広道に関する隆正側の資料がないというだけではない。当時も似たような事情——つまり広道側の一方通行であつたようなのだ。

例えば、こんなことがある。隆正は、先にも触れたように、津和野藩を脱藩していたが、嘉永四年脱藩の罪を許されて復籍する。同じような境遇にあつた広道は、隆正の復籍に大に関心を持つ

たであらう。「井筒屋より承候へハ隆正ハ昨年故藩津和野へ帰京にてヤハリ在京。当春とか江戸へ出候との事由来候。忙々左様之事ニ候哉。この邊ニ而ハ一向不承事ニ御座候。尤書通致候てもいかなる事ニや返事も致不申候。夫故歟も未不申遣候。但し風説などならハ却而如何とも存候間、内々御尋申上候。貴君ニハかの藩ニ御知音も多く御座候御様子。何となく御聞可被下奉頼候。」（嘉永四年二月廿八日高頼宛書簡《関大蔵》）という書簡にそのことがよくあらわれている。「書通致候てもいかなる事ニや返事も致不申候」と、やや憤慨気味である。周防と津和野とは近いので、広道の方が逆に高頼に問い合わせているのである。この後、広道は、五月下旬から七月下旬にかけて、播磨方面の旅行に出るが、その途中、石見へ行く隆正と高砂で会った。「隆正又々石州下り催候由ニ而、過日高砂ニ而半日はかり逢申候。全体石州表之事いか様之振合ニや御示し可被下候。少々不審の事も存候故内々承申度候。」（嘉永四年七月廿六日付高頼宛書簡《桜井氏蔵》）とある通りである。ところがせっかく「半日はかり逢申候」とありながら、一体彼らは何を話したのか、おそらく隆正が広道に何もしやべらなかつたからであらう、ここでも同じ質問を高頼にしているのである。このあたりどうも不自然だが、よくわからない。しかし、「野々口隆正隨身の人」としてはもはや失格といったところであらうか。

隆正に触れた書簡が——私の氣付いた中では最後のものになるが——もう一つある。それは、江戸在住の友人（かつての門人）池辺真樸に宛てた書簡（安政二年三月十九日付・飯田義資「池辺真樸大人伝」所収）で、そこに「野々口隆正三十日計已前帰京之由承り候。江戸は不あたりと聞へ申候。かの風にては、当今異船の中抔

にてはさもあらんと被存候」とある。

嘉永五年十月江戸津和野藩邸に赴いた隆正は、翌六年三月水戸斉昭に謁見。そのすぐ後、自著『文武虚実論』などを献上するとともに、自説を水戸周辺の地で広げようと努力している。そのことは、土浦の国学者色川三中の日記（中井信彦校注『片葉雜記色川三中黒船風聞日記』）に、かすかにうかがえる。つまり、その嘉永六年八月八日の条に、「七ツ時京都住野々口（隆正）氏弟子の上下四人にて来る」とあり、翌日にも「五ツ過時、野々口氏四人来る。酒出し候。」などあるからだ。このとき隆正はすでに六十二才。それでも元氣はつらつと弟子をつれての遊説行脚であることがわかる。翌安政元年十月、帰京の途につくが、途中で地震に遭い、一旦江戸にひきかえす。京都に戻ったのは翌二年のはじめごろである。右の広道書簡は、このようなことを背景に書かれている。

広道は相変わらず、隆正とは何らかの交流があるようで、その消息に通じていた。しかし、この、隆正の伝道行脚の失敗を伝える書簡から受け取る印象は、もはや「野々口隆正隨身の人」が書いたものとは思えない。「かの風にては当今異船の中杯にてはさもあらんと被存候」と、隆正を突き放している。「当今異船」騒動のため、儒者国学者を問わずその対応におかれ種々の海防策が出されている。広道の海防策については別に考えるつもりであるが、とにかく「かの風にては」つまり隆正説のようでは、ほとんど無効と判断した。広道と隆正との、いまにはじまったことではないが、短くない距離を改めて感じさせられる。

この後広道が隆正に触れたものは、今のところ見当らない。ま

してや隆正側にそういうものがあるのを全く知らない。おそらくこのまま疎遠になつていったのであろうか。それでは完全に切れてしまったのかというと、これまたはつきりしないのである。例えば、こんな書簡がある。文久元年三月十日のものと推定される高雅宛書簡（井上編前掲書所収）で、その中に、「先日伊予松山三輪元綱と申者江戸へ出候とて私宅へ参御様子も粗承申候」とある。松山の元綱が、江戸に行く途中まず備中宮内の高雅を訪ね、それから大阪の広道を訪ねてきたというのである。どんな話があったのか、詳しい事情は何もわからない。しかし彼が隆正の門人であつたこと、翌文久三年二月の等持院足利尊氏木像梟首事件に際し、同じ隆正門の師岡正胤らと共に、首謀者の一人であつたことはよく知られている。隆正とのかすかなつながりをこんなところに見いだすのは、うがちすぎだろうか。

『古学小伝』の「誰ヲ師トイフ」ナケレド、……とい広道評と、「野々口隆正隨身の人」という松田直愛の評と、結局、どちらが本当の広道像に近いのか。けれども、そういう二者択一は、本当はあまり意味のないことなのかもしれない。とりわけ、幕末期の混沌とした文学（思想）運動の中に身を置いた人々は、いい意味でも悪い意味でも、きわめて状況的にならざるを得ないだろうから。しかし何はともあれ、以上が、「（広道は）国学を大國隆正に学んだ。」という伝記的記述に対する、さしあつたての「但し書き」である。

《注》

(1) 森川彰「萩原広道の自叙伝」(『混沌』第八号)に、十四才までの未完の「自叙伝」の翻刻と解題が付されている。

(2) 拙稿「萩原広道の和歌」(『国文論叢』第十八号)参照。

(3) 正武の編んだ歌集には、《恋》の歌がない。自序によれば、「正武、父隆正にもの学びするをりく、哥をよむとき実情をなうしなひそと常にのたまふにつきて、恋歌ハ題をまうけてよむべきわざならずと、思ふころをきこえしかば、翁もゆるさせたまひぬ。」とある。隆正の了承のもとに《恋》の部立てをカットしたらしい。広道は本文に引いた書簡の続きで、この点にふれて「同人考ハ朱学者のやうなる見解と見え申候」と批判している。隆正を直接批判しているわけではないが、しかし無縁ではあるまい。

(4) 『村田春門日記』(『渡辺刀水集 三』所収)の天保五年四月二十日の条に「今井維清来、此度上方遊歴存立、一柳土佐守殿共にて、浪華迄登候よし、為暇乞来、改名いたし野々口正作隆正といふ、…」とある。かつての師・春門のところへ「暇乞」に来たのである。ところで、「一柳土佐守殿」とは、播磨・小野藩主のことで、隆正がすぐ後で小野に招かれ藩の子弟の教育を託されるのも、江戸在住時からの因縁によるらしい。なお、彼の年譜は、『国学者伝記集成』(第二巻)所載のもの、日本思想大系『平田篤胤・伴信友・大國隆正』付載のもの等によった。

(5) この点に関して、水田紀久氏が、広道の富永仲基への傾倒を指摘しているのが興味深い(『新修 大阪市史 第四巻〈近世日〉』。というのも、広道の注釈態度は仲基の「加上」説を想起させるからである。この「加上」説については、日本思想大系『富永仲基・山片播桃』の水田氏による「解説」参照。

(6) 拙稿「直養と広道―ある幕末国学者たちの交流」(『日本文学』第

四〇巻第九号)参照。

(7) 『義門研究資料集成 上巻』所収。なお、森田康之助『伴信友の思想―本居宣長の学問継承者』参照。

(8) 安民の伝記については、川嶋右次「秋元秋民と動皇運動」(『国学者研究』所収)島田清「姫路藩の勤皇の志士秋元安民と山崎」海老沢尊照「評伝 秋元正―秋元家の三代―」など参照。

(9) 隆正に従って出た安民の京都での行動は、ほとんど分かっている。ただ、隆正の主催した天保十二年三月十六日の歌会の記録が残っていて、そこに、「隆正をはじめ、岩倉具集、岡部重平、隆正の養子正武、秋元安民などの他に僧侶、公家の諸大夫、各番藩士、劍工、商家の婦人、隆正の家族までの名前」(南啓治「大國隆正伝補遺―思想学問確立を中心に―」(『近世国文学とその周辺』所収)が、あるという。安民の消息がこうして伺える。

(10) 島田清前掲書に、「安民は隆正の許しを得て、その(信友の)門に入った」とある。あるいはひょっとすると隆正に勧められたのかも知れない。ただ、信友のもとにあった安民の消息もよく分かっていない。広道は、西田直養の「神聖考」(をめぐる論争)を評した「神聖考疑傍評私議」の中で、直養の説(大殿祭祝詞)に載る「天津璽乃鏡劍」という表現中の「乃」は「及」の誤りだとする説を批判する中で、「故伴氏信友も同様にいはれたるよし秋元安民の談話に聞たりき」とあって、安民経由で信友の直話を記している。(注(6)の拙稿参照)。また、大鹿前掲書に「交友名列(抄)」が付載されていて、そこに「弘化二年七月廿一日初見」とある。安民の信友入門は、広道の大坂移住後のことであつたらしいことがわかる。

(11) 信友の伝記については、森田前掲書をはじめ、弥富破摩雄・横山重校訂『伴信友家集』所載の「伴信友翁小傳」(弥富破摩雄筆)など

を参照。年譜は、川瀬一馬・大鹿久義編『伴信友全集 別巻』付載のものが詳しい。

- (12) 広道の藤井高雅宛書簡（弘化三年十二月十一日付。井上編前掲書所収）に、「伴信友翁歿去さそ御承知可被成、さてさてあたらしき事にて御座候。歳に不足はなく候へども壮健なる人なりと承候て、来春はぜひ上京対談可仕と存候処、鬼哭之至御座候。実に天下之学者ばしらを失ひ候と私は存事に御座候」とある。広道の信友への傾倒ぶりがよくうかがえる。

ところで、本文にあるように、広道は直愛を介して信友に短冊を贈ったわけだが、それが信友との交流の最初ではなかったようだ。というのも、弥富・横山校訂前掲書に信友の「交友名簿」が付載されていて、その「備前」の欄に「藤原広道」とあるからだ。広道が「藤原」姓を改め「荻原」姓を名乗るのは大阪に来てからだから、信友との「交友」は、すでに備前岡山にいたときに始まっていたのではないか。この名簿のはじめに、「此れは伴信興氏寄贈の材料を基にして、更に増訂し分類したものである。通称、名、号あつて、一定せざるは、聞き馴れたものに随つたためもあり、又不明であつたためもある。場所も発信地によって、必ずしも生国でないものもある。」との校訂者の識語がある。おそらく、まだ備前岡山にいた時分の広道の書簡（またはその控えが伴家にあり、それに基づいて「交友名簿」に「備前藤原広道」と記されたのであろう。なお、前記大鹿前掲書の「交友名列」にも、広道の名は出るが、「荻原」姓である。ただし大層興味深いことに、「野々口隆正紹介」とある。注(10)で少し触れたように、隆正門の安民が信友に入門したの、隆正の紹介によつたのかもしれない。岡山にあった広道も隆正の紹介によつて信友との「交友」関係を結んだというこころらしい。

- (13) 三木幸信「義門の研究」参照。直愛の名は、近藤芳樹の日記や、加納諸平や小野務の文集にも見え、中島広足『樞園隨筆』などにも出る。

- (14) 森川彰「荻原広道の上阪」〔『混沌』第六号〕参照。

- (15) 『本教提綱』の成立等については、森川彰「本教提綱―その書誌―」〔『混沌』第十号〕が詳しい。

- (16) 注(6)の拙稿参照。

- (17) 隆正の「本教運動」がどの程度のひろがりをもつたものかよくわからないが、広道とのかかわりの範囲で言えばこういうことがある。

広道の安政二年三月十九日付の池辺真樸宛書簡（前掲）に、「此節備後福山にも文武の学校十号は誠之館水戸老公の御扁額とか一建立有之国学寮を第一位に被致候て野生が旧友松本長兵衛と申者世話方に被仰付候由何卒参りくれと申越候へども多忙故謝して参不申候。大分盛なる事と相聞へ申候。追々諸方に此体の拳は出来可申勢ひに聞へ申候。先々何にしても少快には至申候。」とある。兼重治郎「福山藩誠之館」によれば、福山誠之館は、安政元年九月に着工し、翌年一月に開講式を行っている。その「国学」の教授の一人に、広道の旧友松本長兵衛（良遠）の名がある。その長兵衛（と森島新太との連名）の、「本学四科論」と称する上申書が、『広島県史近世資料編VI』に載る。この上申書はごく短いものだが、その大半が隆正説を書き写したものと云つていい。しかしそれはともかく、この上申書がいわば「運動」の一環として書かれたものであることは、最後の次の部分にあきらかであらう。例えば、本文中に引いた隆正の『神理一貫書』の言葉に照応するところが多い。

是等之事業を世間にて国学・和学など申候へ共あたらしめ事二御

